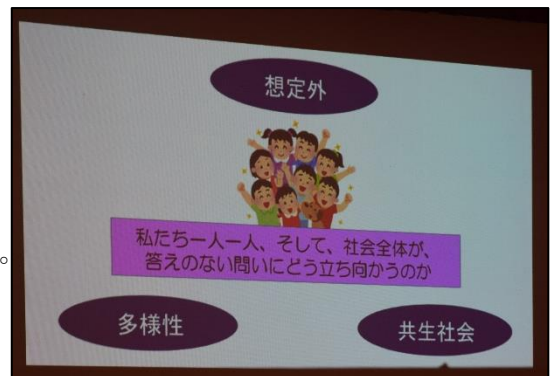


令和5年度 旧西条管内生徒指導夏季研修会 実施報告書

- 1 日 時 令和5年8月8日（火） 14:00～16:00
- 2 場 所 西条市中央公民館（多目的ホール）
- 3 講演内容
 - ・ 演 題 「全ての子どもたちが安心して過ごせる居場所について考える」
 - ・ 講 師 愛媛県総合教育センター 教育相談室 室長 伊賀上 知晴 氏

(1) これからの学校に求められるもの

現在の学校が抱える教育的課題は「自殺」「不登校」「いじめ」「特別支援学級・学校在籍」「児童虐待」「教員の休職」の増加など多岐にわたる。これからの時代は予測困難な時代であり、みんな一緒の教育では通用しない。それぞれのペースで学び、対話を通して納得解を探していく時代がきている。私たち一人一人が、そして、社会全体が答えのない問いにどう立ち向かっていくのが大切である。学校の在り方を問い直す必要はないだろうか。



<写真1 これからの学校に求められるもの>

(2) 生徒指導とは（生徒指導提要改訂より）

ア 「定義」は児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができ存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のこと。

イ 「目的」は児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること。

ウ 「させる」から「支える」生徒指導への転換

エ 生徒指導の実践上の4つの視点として、「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」がある。「安全・安心な風土の醸成」は新たな視点である。



<写真2 研修会の様子>

(3) 全ての子どもの居場所について考える

ア 「全ての子どもたち」とは、どんな子どもたちか

「教室で過ごしている子ども」「教室と相談室等で過ごしている子ども」「教室には入れないが、相談室等で過ごしている子ども」「支援が必要な子ども」「タッチ登校の子ども」「学校に行きたくても行けない、行かない子ども」など。

イ 「絆づくり」と「居場所づくり」

教職員が居場所をつくり、児童生徒が絆をつくる。安心感は教師が与えるのではなく、子ども自身がつくっていく。全ての子どもが当事者になる。

ウ 生きる力

自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決することが、子どもの自立につながる。

子どもたちが当事者となるために、本人に考えさせる。自分で考えて、行動しつつ、失敗しても適切に他者に依存できたり、自らが必要な支援を求めたりできる環境を大人がつくる。

エ 子どもに自己決定の機会を与えていく

自己決定の機会→自己肯定感が高まる→自信や主体性が身に付く

オ 子どもたちの本音

「休み時間がなくなれば学校に行ける。」それぐらいのことだと思うかもしれないが、彼らは真剣に悩んでいる。困っている子どもたちが困らないようにするには、自分に何ができるのか考える。そう考えることによって、支援の在り方を私たち自身がアップデートできる。教師は子どもから学ぶことが大切である。

(4) まとめ

大人は自分の主観で子どもを見ていることが多い。それでは子どもの本音を聞くことができない。子どもを、一人の人として対等に接し大切にす。そして、自分自身を「子どもの問題」の中に入れて考え、自分自身の行動を振り返る。子どもは自分なりの考えを持っているので、子どもの考えが本当に最適なのか子どもと一緒に考え、高めていくサポートをしてほしい。

(5) 参加者の感想

- ・ 年前と比べて小学生がなりたい職業も変化している。みんな一緒の均一性が求められた時代からの変化を改めて実感した。予測困難な時代だからこそ、対話を通して納得解を求めていく指導が大切であることを学んだ。
- ・ 生徒指導提要の改訂を分かりやすく説明してくださり、「させる」から「支える」生徒指導に転換していかねばならないことが講義全体を通して理解できた。
- ・ 「教師が掛ける言葉は、これからの子どもの人生を左右するメッセージである」この言葉が胸に響いた。自分自身の日々の声掛けを振り返り、2学期以降の実践に生かしていきたい。
- ・ 子ども一人一人にとって受け止め方が違うということは常に意識しておかなければならないと痛感した。全体に対して大きな声で指導をしてしまっている部分があるので、周りの子どもたちへの影響や、指導を受けた子どもへのフォローを考えなければならぬと思いを強くした。
- ・ 「全ての子どもたちの居場所をつくることができるか」と聞かれると、自信をもつてうなずくことができなかつた。教員自身も関係諸機関と横のつながりを持ち、安心できる居場所づくりを再構築していかなければという思いにさせられた。
- ・ 子どもに自己決定を促す「3つの言葉（どうしたの、どうしたいの、先生にできることはある）」は参考になった。どうしても教員が頭ごなしに指導をしたり、考えを決めつけたりしている場面があるので、子どもに自己決定の機会を与えていく工夫をしていきたい。
- ・ 子どもたちの本音のスライドは自分自身もはっとさせられることが多くあつた。子ども一人一人が自分なりの考えを持っていて、それが最適かどうか一緒に考え、納得解を見付け出していく支援を考えていきたい。